

---

# Fate/ nightmare

ウォリアー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate / night mare

### 【NZコード】

N3975Y

### 【作者名】

ウォリアー

### 【あらすじ】

月の聖杯が無力化されて数年後、世界は仮初めの安定を得ていた。安定とは崩されるものであり、新たな戦いが始まろうとしていた。新たな聖杯、新たな聖杯戦争。

イレギュラーとして戦いに巻き込まれた少年は何を選択し、何を答えとするのか。

こういうのが苦手な人も嫌いな人も一回読んでみてください！！！  
それと、感想お願いします！！

## 第一話 準備期間／召喚

浮上する。

消えたはずの意識が現れる。

“ソレ”には何も無かつた。

本来なら最初から存在していない、“ソレ”はそう言つ存在だった。しかし、かつての“ソレ”は一つの“戦争”を駆け抜け、そして多くを手に入れ、それを自ら捨てた。

何故、“自分”は存在している?

“ソレ”は誰にとも無く呟く。

「何が何だか解らないって顔してますね。ご主人様」

と、聞き慣れた声が“ソレ”的耳に届く。

もう一度と聞くことは無い、そう思っていた声だった。

開幕のベルが鳴る。

魔術師達は、己の従者を呼び覚ます

クラスは七つ

セイバー、アーチャー、ランサー、キャスター、ライダー、アサシン、バーサーカー

戦いは、すでに始まっている

理想の為に戦うもの、信念の元に戦うもの、命令の為に戦うもの、ただ何となく戦うもの、願いの為に戦うもの、生きるために戦うもの、認めてもらうために戦うもの

戦う理由は数あれど、栄光を掴めるのは一人のみ

戦い、勝つて、力を示せ

聖杯は、最も強き者の前にのみ現れる

延々と続く退屈な日常、それは彼にとって苦痛の内に数えられるものだった。大抵の人間には人生の中にこんな時期がある。多くの人はそれに気づかず、また気づいても無視していくのが当然とされる時期だ。

「よ、加納！！」

「どうした？ 氷室」

やたらとテンションの高い声で話す友人に彼……加納英一は多少げんなりした声で応える。

「いや、凄い物を手に入れちまってさ…… オークションで万単位の金を使って手に入れたんだよ……」

友人……氷室晶は興奮した様子でまくしたてる。「……一体でも有名なオカルトマニアの氷室はいつもこんな調子だ。

「今度は何手に入れたんだ？　まさかまたランスロットが使った木の棒とか、イスカンダルの着た服の切れ端とか、下らんもんじゃ無いだろうな」

「ふつふつふ、聞いて驚け！！　今回手に入れたのは何と…！　かのヘラクレスが使ったと言われる武器の…！…！」

その言葉を聞いて英二はげんなりした表情を作る。その表情にはまたか、と言つてコアンスが含まれている。

「どうせ、いつもの偽物だろ。　大体、どこから買つたんだよ、それ

「ん、出品者は確か遠坂とかといったつけ。　とにかく凄いんだよ！　！　」

帰つたら見に来いよ！！と言いたいことだけ言つて氷室は自分の教室に帰つていく。周囲からの同情の視線が痛い。オカルトマニアとして有名な氷室には友人らしい友人が加納しかいない。氷室関係の厄介事は全部加納に押し付ける、と言つ風潮が出来上がつてゐるくらいだ。

加納は溜め息を吐く。とは言え加納には氷室との友情を無かつた事にする気はさらさら無かつた。氷室は退屈な日常に非日常を持ち込んでくれる、貴重な人材だ。失うわけにはいかない。

「さういや、明日はアイツの誕生日だつたな」

思い出したよつこつぶやく。心靈写真でもプレゼントするか、と加納は思いつく。この街には廃墟が多い、何故かは知らないが。適当に周ればどつかで撮れるだろつ、彼はそう考えて前を見る。朝礼が終わり、一時間目が始まる。前の英語の教師が急病で亡くなつたため、新しい教師を紹介する。担任はそんなことを言つている。

「彼女が新しい英語の教師のラナ先生だ。みんな、仲良くしてやつてくれ」

「ラナ・ソフィアです。イギリスから来ましタ。皆サン、仲良くしてくださいね」

やや片言だが、それでも流暢な日本語で自己紹介する。アッシュブロンドの髪と、蒼い瞳、特殊な性癖を持つ者がいない限り100人中100人が美人と答える人間だろう。ラナは、生徒からの質問に答えていく。

「そう言えば、この街には昔から面白い話があると聞きました。何が知つていることありますか?」

「あー、血口紹介もほどほどにしてだな、それじゃ、授業頼みます」

そう言つて担任は教室から出でていく。残された生徒たちは普段真面目に授業を受けないようなヤツも真面目に話を聞いている。流石の美人教師効果だなと加納は感心する。

その後、加納にとつては何もないままに授業は進み、日程は進み放課後になる。

「それじゃ、行きますか

そう言つて、加納はこの街の著名な廃墟を見て回る。地元では有名な自殺者の絶えない自殺ビル。昔、殺人犯が潜伏していたと言われる殺人ビル。かつてはこの街の産業の一翼を担つていたが、不景気に煽られ経営者が失踪し、実は地下に死体が埋まつていると言われる死体工場。かつて、富豪の一家が住んでいた幽霊屋敷。館長がオカルトに傾倒していたと言われる閉館した博物館。事故で客足が遠のいて潰れた呪われ遊園地。

「後は、ボロボロ神社と近代聖堂くらいかな」

ボロボロ神社とは、参拝客があらず誰にも管理されないまま朽ち果てていつてている町の郊外にある神社だ。何らかの邪神を祀つていたが為に潰されたと言うのが氷室の主張している説だ。近代聖堂も、基本的にはボロボロ神社と変わらない、ただこの聖堂の周りにはたまに黒服がうろついている事があるらしい、無論、氷室の言だが。持つているスマホの地図アプリで現在位置を確認する。近くにあるのはボロボロ神社だ。加納はボロボロ神社に向かつて歩き出す。

「さて……、と」

さつそくカメラを取り出して加納は写真を撮りつとする。

「何の用かな」

「うわあおーー！」

いきなり背後から声をかけられて加納は悲鳴を上げる。

「そんなに驚かなくても良いんじゃないかな……」

加納の後ろに立っていたのは加納より少し年上くらいの青年だ。加納は息を落ちつけようと深呼吸をする。

「もしかして参拝客の人かな？ だったら、お賽銭箱はあっちだよ

青年は加納が息を整えるのを待つてから再び話しかける。

「い、・・・いえ。 ところであなたは？」

加納は息を整えながら青年に質問する。

「何つて・・・、見てわからないかな」

加納は改めて青年の姿をまじまじと見つめる。その姿は……。

「神主？」

「そ、ここはちょっと前から協会の管理下に置かれる」とになつたからね。僕は今日だけこの神社の管理を任せられたってわけだね」

青年に言われて良くな見てみると、神社の離れに明かりが灯っているのが見える。

「ああ、わかった！ 君、怪奇スポットとか言られて来たヒトでしょ」

図星を付かれ、加納は氣まずさを感じる。

「……こえ、そんな事は

「いへんだよ、グリーンだよ。」が荒れ放題だつたのは僕も  
知つてゐし、否定してもどうしうも無いしね

青年は笑顔で言つた。

「寒いですよ、」

「神主」

いつの間にか、巫女装束の女性が現れていた。青年は寒いと言わ  
れて地面に膝をつく。しかし、すぐに立ち直り

「ま、良いや。それよりおやつでも食べてかない？ その代わり  
この神社が廃墟じゃなくなつたからお賽錢を入れても良いってみ  
なに言つてもうひり事になるけど」

「」と呼ばれた神主は加納の手を取る。加納は慌てて断る。

「すいません…… 今日は友達との用事があるので……」

加納はうつむいて回れ右する。

「待つて…… や、そうだ。 ただ良いくからおみくじ引いてつ  
よ。 それなら時間もかからないでしょ」

「おみくじ……ですか」

断る理由は無こと考えおみくじを引くこととする。

「中古、か。特に良くも悪くもないですね」

それが、変わり映えのしない毎日を指しているよつで加納は嫌になる。おみくじを結んで加納は近代聖堂に行く。

「また来てね～～！！」

加納は、まあ良い人たちかなと思いながら神社を後にする。

加納が去つてから少しだけ時間が経つた。

「『主人様、さつきの・・・』

「.....キャスター、念のため、だけど」

神主の青年は神社の離れに向かい、ほどなくしてワイスシャツとジーパンにブーツと活動的な服装に着替えて、鞄を持って出てくる。その目は先ほどまでの人の良い神主の物では無い、例えるなら戦場におもむく兵士のそれだろう。

「式を飛ばして尾行してくれないかな。僕も動こうと思つ

「そういう事に限つてほしいけどね、と『用は弦く。

「そういう事に限つて気のせいじゃ無いんですよ。『主人様』

解つて、青年はキャスターと呼んだ少女にそう返事する。

「ムーンセル・オートマトンが予言を外す可能性は限りなく少ない。僕も、“バタフライ・エフェクト”を武器にしているくらいだし  
ね」

「月はそう言つて玉砂利を蹴飛ばす。玉砂利のいくつかは神社の前の道路に落ちる。そのうち小さい石は排水溝に入り下水に流される。

「行こうか、キヤスター」

頑張れば、最悪くらいは防げるかも知れない。

それから少しして、神社の前を黒塗りのリムジンが通り過ぎた。リムジンは近代聖堂に向かって走っている。リムジンはそのまま砂利を踏みながら進んでいく。しかし、砂利の一部はそのままリムジンの車体に滑り込む。そのままリムジンは何事も無かつたかのように、実際に何事も無く進んでいた。

もない。

「気配遮断の術、か。この国のニンジャの技術も中々侮れないわね」

彼女は母国語でつぶやく。そして、殺人ビルと呼ばれる廃墟に入つていく。それを止める者は一人もいない、否、一人も彼女の姿を見ていらない、と言つべきか。そのビルには誰もいない。彼女は誰にも気づかれずにビルの中心に向かう。その部屋には何やら棒状の物体がビニールシートに包まれていた。

彼女は乱暴に棒状の物体からビニールシートを取り去る。そこには一本の鎧びた鉄の棒の様な物体があった。

「間違いないわね」

何かを確認した後、彼女は円を描く。魔法陣、そう呼ばれる物を。そして、円の中央に棒を置く。

「私は願う。最強の力を」

ラナは詠唱を開始する。サーヴァントを呼び出し聖杯戦争に参加するために。

同時刻、一組の男女が町を見下ろすビル……自殺ビルと呼ばれるビルの屋上に立っていた。

「行くぞ、セイバー」

「はい、シロウ」

そして、二人はビルから飛び降りる。一人は壁を蹴り、壁面の細かい凹凸に体を引っかけながら減速する。そして、難なく地面に着地する。

「準備運動はこれくらいで良いですか？」

「これくらいじゃまだ、足りないな」

「おっそいな、加納のヤツ」

オカルトグッズが散らかっているアパートの一室の中、氷室は一人で箱を開けるのを我慢していた。

「先に開けちゃおつかな、いやいや、ここは友達を待つべきだ」

氷室は貧乏ゆすりを始める。そして、氷室の足が棚に当たり、棚が倒れこんでくる。棚の上の大量のオカルトグッズや妖しい薬品がヘラクレスの遺品の上に雪崩れ落ちる。

「ちよつ、なんつー！」

遺品を救うべく、必死にオカルトグッズを掻き分ける。

氷室はグツズを搔き分けながらぐちぐちと咳ぐ。しかし、氷室の愚痴はだんだんと小さくなり、そして、遂には驚愕の叫びに代わる。遺品の周りに幾つかの光が漂い始める。小さく明滅した光は、他の光を取り込んで大きくなる。

「沼喫陣は」れで良しつ

一人の少年が地面に魔法陣を書いている。

「頑張れよ、コージン・ベルベット。ここで良いサー・ヴァントを引いて義父上を見返すんだ……」

荒い息を吐きながら陣陣を描き終える。

「ああ、それじゃあ

近代聖堂に黒塗りのリムジンが止まっている。しつそりと聖堂の中を覗き込むと、何やらプラズマの様な物が見える。

「何者だ！！」

黒服が現れ、問いかけと同時に拳銃から銃弾を放つ。

『いきなり撃つのかよ…』

加納は自身の好奇心を恨み、そして駆け足で逃げ出す。

「どうする、御当主サマ。ワタシのアサシンで追いかけても良いけど」

年齢は12・3歳くらいだろうか。フードを被った褐色の肌の少女が老人に話しかける。

「ふむ、いや、そうだな。単に追いかけるだけでは興が乗らんだけ。そこで提案だ。あの者が帰る前にあの者の家族を皆殺しにする、と言つのほどつかな」

提案と詰つたの命令、その悪趣味さに少女は思わず顔をしかめかける。

「……断んなよ。お嬢にはバーサーカーの召喚を続けさせな」

少女の言葉に満足したのだろう。老人は頷く。

「……、行ってこい、アサシン。アイツの家族を皆殺しにして、その死体を見せつけてから、アイツを殺せ」

「な…………、何なんだよ、コレ…………」

加納は自らの惨状を目の当たりにし、膝から崩れ落ちる。両親だった者はすでに原型を留めぬまでに“破壊”されており、姉の夫は全身を切り刻まれ、姉は臓物を腹から出したまま絶命していた。

「あ…………、ああ…………、ああああああああああああああああああ…………！」

家中には、壁に、窓にテーブルクロスに食器棚に本棚に扉にありとあらゆる場所に血がこびりついており赤くない場所はほとんど残つてなかつた。

「な…………、なあ、みんなして俺を驚かそうつたつてそのはいかないぞ、ほら、氷室とかこういうメイクする道具とか、持つてんの、俺、知つてんだからな。だから、だから…………」

「残念ながら、現実だ」

加納の首に、独特な形状の湾曲刀が付きつけられる。

「まったく、貴様がアレを見たせいで俺が余計な仕事をする羽目になつたんだ。少しほは反省してもらいたいものだな」

全身甲冑を付けた殺戮者は湾曲刀に力を込める。と、いきなり鎧の男が動きを止める。

「出でたらどうだ？ 管理者。 貴様もいるんだろ？..」

「準備期間中の戦闘は出来るだけ避けるよう参加者全員に通達していたハズなんだが」

聖杯戦争の管理者として見過しそうないな、と管理者・・・円が言つ。

「すまない。僕にはルールの縛りがあるとはいえ、君の家族を救う事ができなかつた」

『円は謝罪しながらアサシンの背後から現れ、首にかけられた剣を外す。

「アサシン。これは管理者としての最後通牒だ。今後、一般人には手を出さずな」

「ひらも命令なもんでな。マスターの上役に言つてくれ」

アサシンは軽くよつて言つと、その姿が搔き消える。まるで、最初からいなかつたかのようだ。

「あんたは・・・」

「ああ、僕の名前はフランシスコ・ザビ・・・もとこの円宏也。さつときは神社で会つたね」

青年・・・円宏也は周囲を見渡す。

「最悪、だね。文字通り

周囲にこびり付いた大量の血、奇怪なオブジェの様になつた元人間。それらを見ながら宏也は呟く。

「…………、あんた、ルールがどうたらとか言つてたよな。つまり、あれか？ そういう事か！？ あんたは俺の家族を助ける事ができたのに、そのルールで、助けなかつたのか！？」

「少し違うな。まあ、その話は後にしよう。警察には財団の手が回つているだろ？ から」

そして、宏也は英一に手を差し伸べる。

「それに、君の家族を救う方法が無くなつたわけじゃない

宏也の言葉に英一は顔をあげる。何となくだが、英一にも理解する事ができた。これは分岐点なのだと。ここで宏也の手を取らずに殺人事件の唯一の生存者として生きるのか、それともここで『月宏也の手を取るのか。

英一はのろのろと手を伸ばし、宏也の手を掴む。

「決まりだね」

宏也は呟く。そして、神社に向かうよつと語り。

「僕には後片付けがあるし、何より今は時間が無い。本殿の中に地下に降りる階段があるから」

そう言いながらスマホで電話をかけ始める。そして、英一に手の

ひらサイズの巾着袋を投げ渡す。

「持つてくと良い。 無くさなければ何かの役に立つだろつからね」

英一はそれを受け取ると神社に向かう。英一を見送りながら、宏也は背後の気配を呼び出す。

「…………いーんですか、ご主人様。 “アレ” をあんなシロウトに渡して」

「僕たちがこの戦争に堂々と参加する方法はこれしかない。 それに、今回の戦いにはトワイスみたいなきな臭い物を感じるし」

そう言いながら、宏也は巾着袋の中身を思い出す。

「少なくとも、僕にはあれを扱いきる自信は無いよ」

「…………何なんだよ、これ」

英一は地面に描かれた陣を見る。氷室に似たようなモノを見せられた経験もあり、コレの役割は十分に理解できた。

これは、この世とあの世、彼岸と此岸、現世と異世界を結ぶもの。あちらからこちらへの門。英一はためらいながらも陣に触れる。

「…………に来たという事は、貴様はもはや一般人では無いという事だな」

突如として、背後から声が聞こえる。振り返るとそこにはアサシンと呼ばれていた男がいる。

「感謝する。おかげで貴様を殺してもペナルティを受ける事は無くなつた」

アサシンはそう言いながら武器を取り出す。ショーテルと呼ばれる湾曲した剣を両手に構える。

「恨むなら、お前自身の軽率さを恨むんだな」

そして、アサシンは横殴りに斬りつけ。英一は反射的に避ける。その際に宏也から渡された袋を取り落してしまつ。

袋は、陣に触れる。

「外したか……なら、もう一度……」

「ほとんど一般人じゃ無いですか、彼。こんなのを殺そつとするなんて、汚いですねさすがアサシン汚い」

「だからか、声が聞こえる。英一が周囲を見回すと、袋、正確にはその中身が光っていた。

「しかし、私がルーラーのクラスで参加者に召喚されるとは……。セイバーやランサーなら、もつ少し効率良く戦えたのに……」

管理者は何をやつていたのかと、声は嘆く。

「そして、汚いアサシンのヒレツな一撃を見事に防ぐ私、KAKK

EEEEEEです！！」

声は少女の姿を現し、宣言通りアサシンの攻撃を防ぐ。

「ところでそこの少年、一つ質問をしてしまひよろしげでしょうか」

光が収まる。そして、陣の中央には槍を携え髪を後ろで束ねた若い男が現れる。男は大きく溜め息を吐く。そして、ゆっくりと周囲を見渡し一人の女性を視界に入れる。

「解りきっている事であり、かつ面倒だが、一応礼儀として聞くべきなんだろう。異国の女よ。一つ、問うとしよう」

20

「や、やつた・・・・・・」

コーディンは収まつた光の中から実直そうな軍人が出てくるのを見て歓喜する。整った背筋、身に纏う雰囲気、軍服についている大量の勲章。間違いなく、当たりのサーヴァントだ。

「お初にお目にかかります！――指揮官殿！――さうそくですが、私はどこを爆撃すれば良いのでしょうか！――

言い切つた後、ああ、と何かに気づき軍人はコーディンに問いかける。

「つと、失礼ながら、確認を忘れておりました」

光が收まり、オカルトグッズの山の中からのつそりと大男が現れる。晶は口をパクパクさせながら大男を見上げる。

大男は氷室に視線を合わせようと腰を屈める。

「失礼、お嬢さん。ここはどうだか、教えてもらえますかな」

大男は紳士的な口調で氷室に尋ねる。

「ええと、ここは龍胆市葉原町23・4・502だけど・・・」

氷室の答えに大男は頭に手を当てる。

「・・・じゃあ、もう一つ、聞かせてもらおう」

敬語が外れた。

「・・・あなたが私のマスターか?」

## 第一話 準備期間／召喚（後書き）

感想をお願いします！！厳しい意見も取り入れていいと思います！

## 第一話 準備期間終了／ルール説明（前書き）

今回の話でこの作品のノリを掴んでくればと思います。

## 第一話 準備期間終了／ルール説明

英一は呆然と田の前の少女を見る。ルーラーとして召喚されたと言つた、ビニが神聖をすり感じる彼女はアサシンを睨みつける。

「なるほど、破産教団の下つ端、無銘の暗殺者、と言つたところですか」

「…………イントネーションに悪意を感じるな」

アサシンも同じく少女を睨みつける。

「私は魔女として処刑されたんですよ。悪意くらいあります」

少女は自嘲したような笑みを表情に浮かべる。そして、剣を構える。

「刺突剣？ いや、これは……」

「ちなみにこの剣も鎧も盾も宝具ではないですよ、少し聖別された銀が混ざってるだけで」

少女の構えは独特だ。と、言つよい

「少し剣術をかじつてある程度の軍事訓練を受けただけの素人みたいな構えだな」

アサシンは田の前の少女をそつ判断する。これがわざとなのかどうで無いのかは解らないがアサシンには解らないが、ただ一つ言え

る事がある。

「あ、バレましたか？」

田の前の少女はバカにしてはいけない英靈だといつ事だ。少女は参つたなと言いたげな表情を作る。

「未熟者は<sup>死んだ時</sup>どうづくの昔に卒業したつもつなんですが

少女が一步前に出る。アサシンは一步下がる。

『撤退しろ、アサシン』

アサシンの鎧の兜に仕込んだ通信機から主人の声が命令する。

『「ヒヒ」で死んでも意味は無い。当主サマも避けと言つてこない』

「了解した」

アサシンは眩いで、靈体化する。

「空蝉ですか。まあ、今は生き残れたことに感謝しても良いでしょう。ところで少年、答えを聞きそびれましたがあなたが私のマスターですか？」

英一には、少女の言葉の意味が解らない。呆けた次の瞬間、右手に焼き鎧を押されたような痛みが走る。

「・・・・やつぱり、貴方が私のマスターなんぢやないですか。自分で呼んだじて。大体、一般参加者が管理者用クラスのサー

ヴァントを呼ぶなんて…………」

田の前の少女が何やら文句を言っているが、英一は激痛で話を聞くどころでは無い。

「…………、聞いてないようですね。まあ、良いでしょう。あなたはこの聖杯戦争を私と一人で戦つ、という事だけ知つてれば良いんですから」

宏也の腕に令呪が現れる。サーヴァントを従えた者の証、聖杯戦争参加者の証が。

「令呪が現れたって事は…………」

「そういう事、ルーラーは彼が召喚したらしい」

宏也は笑みを作る。しかし、その表情はすぐに顰められる。

「ま、こんな事態が引き起こされたし手放しで喜ぶわけにはいかないかな」

周囲にはかつて英一の家族だった者の残骸を淡々と片付ける魔術師たちがいる。

「…………」主人様は優しすぎるんですよ。もつ少し突き放しても魔術的には全然OKですのに

「タマモはそんなヤツに仕えたいと思つかい？ まあ、一般論でね

飄々とした口調を崩さず青年は自分のサーヴァントと会話を続ける。

「そうですね・・・。 ま、進んで仕えたいとは思いましたね」

つまり、そういう事だ。『月はそう言って会話を締めくくる。

「それに、今回の僕はすでに何も知らない一般人を巻き込んだんだ。自分がプレイヤーになるためにね」

『月は自嘲の表情を浮かべる。そして、そう言えばトキヤスターに尋ねる。

「結局アーチャーのマスターは出てこなかつたな。 確か、家が没落してしかも娘が中東でテロ活動を行つている魔術師一門から誰かが来るとか聞いていたんだけど」

「あー、それがですね。 その一門、食つに困つて触媒売りに出しちゃつたらしいんですね。 ま、今更魔術師なんて売れない仕事に就くよりか、好事家に売りに出した方がその触媒もその一門も、儲けものにはなるでしょうしね」

「あれ？ 確か、その一門の当主って・・・」

「あの保健室にいたNPCのモデルになつた女ですね。 確か遠坂桜とか。 他の家に養子に行つてたのが本家を継ぐつて問題になつたらしいですが、アインツベルンとか言う名門と衛宮家の跡取りが後押ししたおかげで継ぐことが出来たとか」

「本家の、アレか」

「ええ、アレです」

二人は赤い少女を思い出す。結局あの少女は生きて帰ることが出  
来たのだろうか。それを確かめる術は存在しない。

「そう言えば、ランサーのマスターは抵抗勢力出身だったな  
レジスタンス」

「ええ、確かに昨日この街に来たらしいですね。マスター、浮氣し  
ちゃダメですよ」

「それは無い、安心して良い」

宏也は笑みを作る。そもそもこの戦いでイレギュラーを起こした  
のも元はと言えば・・・・・。

「ま、それについて考えるのは後でいいからでもできる。今は田の前  
の問題に取り組むべきだろうな」

宏也はそう言って構えを取る。そして、武器を取り出す。視線の  
先には使い魔がいる。

「キャスター、悪いが今回は僕に戦わせてくれると助かる。使い魔  
程度なら安定して勝てるようになつておきたいしね」

「しょうがないですね。ま、『ご』主人様も男の子だったといつ事で

そう言ってキャスターは靈体化する。宏也はそれを横目で見る。

「西欧財閥の魔術師か。確かにレオを殺したのは僕だけ……」

襲い掛かつてくる使い魔、どこか機械的な姿のソレは主人の後継者を殺した男に襲い掛かる。

「接続開始、接続完了、システムチェック開始、終了。敵性存在構成の解析完了。干渉開始……負けてあげるわけにはいかないな」

「で、どうする？ 異国の女。主としてはこの戦い、マスターを一人潰せれば、目的は達成できるのじやろ？」

ランサーはラナに話しかける。

「そうね、とりあえず今回の戦いのルールを聞くまでは安心できないわね。まあ、義兄さんみたいな失態は犯さないわよ」

後半は弦くよつと言つ。

「ルールとな。最近の戦は面倒なモノじやのう。わし等の時代はもつと単純だつたぞ」

若武者は笑つ。

「参考までにどんなものだつたか聞かせてもらつても構わないかしら」

「何、あらゆる手段を使って殺し、自分は殺されないよつとするだけじゃ」

「確かにシンプルね・・・」

だが、トランは思つ。それを実際にやつすると難しこじるかほぼ不可能であることを。何故なら戦いにおいて殺されるのは前提条件だ。生き残ったヤツではなく殺されなかつたヤツが戦場から帰ることが出来る。

「まあ、わしからしてみれば、争いなんぞどんなモノでも下らんもんよ。なんせ一束三文で解决出来るような行いにわざわざ命をかけるんじゃからの」

「・・・そのしゃべり方は何とかなんないの?」

「む、折角英語を使つてやつてるの?、ひどこ言こ草だな」

「ハンサーはやつ言ひてひへつと笑つ。

「・・・じつらこせよ、そろそろ始まるだ。聖杯戦争が。令呪から色々とよえられたんじゃね」

「へー、つまり貴方は聖杯戦争のために召喚されたサーヴァントってことで私たちは聖杯を手に入れるために戦つ事ができるってわけ

ね

「そういう事になるな。 今回は細かいルールがあるらしいが、まあ参加したくないのならここで私に令祝を使って自害せると良い。 状況から見ると、君は望んで私を召喚したわけでは無いのだろう？」

アーチャーはいつの間にか、携えていた武器を置く。

「ヒートの宝具を勝手に複製しておいて拳銃に公文袋をいつの技扱いをして、射殺す百頭は元々私の宝具だと詮づけて……。」

「……何を言つて居るのか、ちょっとと解らないかな。 それと、メタな発言はやめろと詮づけてこのサル……。」

晶は呟きながら巨大な石の塊を見る。

「まあ、良いだらう。 とにかく戦うのか戦わないのかはつきりしてくれる助かる。 もし、戦うのなら私は君に絶対の勝利を捧げよう。」

「少しは余裕ができましたか？」

少女は英一に声をかける。 英一は取りあえず疑問を投げかける。

「あなたは、一体……。」

「だから、呼んだのは貴方でしょう！！ 貴方が私を呼んだせいで聖杯戦争そのものの進行が遅れたんですね！！ 反省してくださいしましたかしましたねしましたよしてませんか、そうですか…」

少女はもの凄い剣幕で英一を叱る。と、そこで英一の令呪が光を放つ。

「……全てのサー・ヴァントがそろいましたか。今回の戦いには明確なルールが有ります。基本的な説明は令呪を通して行われるので忘れないように」

そして、全ての参加者にルールが伝えられる。

『ルール、この情報は全てのマスターに令呪を通して伝えられる。ルール、この聖杯戦争では一日に一つ、全ての参加者にミッションが伝えられる。ルール、ミッションを誰一人成功させることができなかつた場合、全ての参加者から令呪を三つずつ、剥奪する。ルール、ミッションを達成することで、聖杯より特典が与えられる。ルール、戦闘に際し相手の生命は保証せずとも良い。ルール、ミッション達成後の戦闘を禁ずる。ルール、この戦いに最後まで勝ち残れば万能の願望器である聖杯を手にすることが出来る。ルール、この聖杯戦争においては各参加者に一つずつ拠点が与えられる』

頭の中に直接情報が流れ込んでくる。その情報の意味を英一は咀嚼する。そして、願望器と言つ言葉に気付く。

「願望器つて……」

「言葉通り何でも願いを叶えてくれる魔法の杯、それが聖杯ですよ

「それは、本当か！－ えつと」

「ルーラーと私の事は呼ぶと良いですよ。 私も貴方の事はマスターと呼びますから」

「文脈がつながってないぞ・・・」

「そうでしょうか。 ま、構いません」

「そこは構えよ・・・ルーラー」

「ところでマスター。 貴方はどのよつな願いを叶えたいのですか？」

ルーラーの言葉で英一は気付く。 こに戦いに勝つことが出来たら家族を取り戻す事ができるという事に。

「まあ、別に答える必要はありません。 私の事は言われたとおりに動くロボット程度に思つていてくれれば問題ないですしあすし」

「お前・・・そんなんで良いのか？」

英一は思わず聞き返す。

「・・・・・貴方みたいなのがマスターとは。 大体人間にとつて最も原始的な『ミコニケーションは奪い合いでしょう』

「そんなもんかな・・・」

「貴方も人間に對して何か希望を持っているなら捨てた方が良いですよ。そうすれば失望して苦しむことも無くなります」

ルーラーは呟いてから英一の隣に座る。

「とりあえず、拠点に向かいましょう。私たちの拠点はここから少し行ったところに有るらしいですしあすし」

「…………何でお前の会話にはいちいちネット用語が交じるんだ？」

「そこいら辺にはあまり踏み込まないでもらえると助かります」

有無を言わさぬ口調で少女は英一の疑問を断じる。

「元々、公式のネットゲの為に設定があったからなんて言えるわけないじゃないですか」

「OK、今ので大体分かった。それとメタな発言はやめろ」

そう言いながら一人は神社の地下から出る。

「これまた厄介なルールが制定されて来たわね……」

「ふむ、このルールの何が問題なのか教えてもらつても構わんかの」

「ランサーは明らかに何が問題なのか分かった上で聞いている。

「やうね、まずハミッシュの内容のもよるけど……、このルールだと全く動かずに相手が減るのを待つって言つて常套手段が使えないのよ」

「いやいや、他のマスターが勝手に達成してくれるかも知れんぞ」

「それは他のマスターもそう考える。それで誰も達成しなかったら、わかるわね？」

「全滅、か」

「そういう事よ、ランサー。それに、特典つてのも気になるわね。仮にそれが情報とかなら動かないヤツほど不利になつていぐ。かと言つて動きすがると……。」

「全体からの集中攻撃か。潰せる者から潰すのは、まあ美しいとは言えんが常套手段だしの」

「かと言つて、あまり奔放に動きすがるとこひりの手をとらす事になりかないって事かな」

「ふむ、なかなかの聰明さをお持ちの様だな」

「当たり前でしょ。折角直接関わることが出来るんだから。 素

人だからって勝ちを狙っちゃいけないわけでも無いでしょ」

晶は言ひ募る。

「それに、上手くすればまた会えるかも知れないしね……」

「？ 何のこじだ」

「私自身諦めかけていた事よ。昔、本当に昔。この街に来る前に出会った魔法使い。今度会うときはお互に誇れる自分になつておこいつて約束した紅い魔法使い。ひょっとしたら、また会えるかも知れない」

アーチャーは部屋を見回す。

「なるほど、この部屋は追いついた結果と言つわけか」

「そゆこと。私も頑張つて、少しでも追いつけるようになりたい」

「なるほど、貴方の願いは戦つ事そのものと言つわけか。私との相性は良さそうだ」

「…………ライダー、今回のルールはビリヤードへ。」

コーディンが見回すと、すでにライダーはいない。

「ライダー……」

「何ですか、上宮殿…… ちなみに策ならありますぞ……」

「……お前も何か考えていたのか」

呆れた声音でコーリンが叫ぶ。

「心外ですね。 及ばない身の上ながら英靈の端くれたるこの私には主たる上宮殿を勝たせる義務があります」

「で、どんな作戦だ」

「コーリンの言葉にライダーは笑みを作る。

「決まつております。 私の十八番、急降下爆撃を全てのサーヴァントが集まつた時にぶちかませば良いだけの事です」

役者は揃つた  
舞台は整つた

世界は塗り替えられる  
新しい色に

・・・・・舞台に紛れ込んだ観客は、どう踊る?



## 第一話 準備期間終了／ルール説明（後書き）

この作品は、オリジナルとは微妙に違う事が解つてくれば。  
ちなみにサーヴァントの真名、解りますか？

「では、作戦会議とこきましょつか。マスター」

ルーラーからの提案で拠点に向かつた英二。今回の戦いにおいては従来には無い特殊なルールがいくつか定められている。その一つがこれだ。

今回の戦いでは全ての参加者に拠点と呼ばれる魔術工房が貸し出される。この街の廃墟を利用して作られたソレは、一流の魔術師の作った物に匹敵する。要は、正攻法による突破が不可能だという事だ。とは言え、以前の聖杯戦争では工房が作られたビルごと爆破する暴挙に出た魔術師もいたらしいが。

「それは良いけどよ・・・」

「どうしましたか？ 恐気づいたならさしつかと令呪を使って私を自害させれば良いじゃないですか」

「・・・・・キツいな、アンタ」

「キツい？ 貴方、何もわかつてないようですね。この戦いには他の何を犠牲にしても叶えたい願いを持つバカが情け遠慮容赦無く参戦しているのですよ。手段など選んではくれませんし手加減など夢のまた夢。今逃げるんならまあ、命までは奪わないでしょ

「う

ルーラーの言葉はあくまで辛辣だ。

「とは言え貴方がもし、本氣で戦うならまずはマスターの権能について幾つか話しておきましょう。ステータスの閲覧くらいは出来るよつこなってもらわないと」

「セイバーのマスターはあの衛宮か。 わかつたわ。 情報感謝する。 ええ、解ってる。 あまり熱を入れないよつこにするわ」

そう言つてランナは通話を終える。

「ランサー、情報が手に入つたわよ。 明日の朝一番にセイバー陣営に仕掛ける」

「いきなりセイバーとは、お主、急ぎ過ぎてはおらんかの」

ランサーは多少驚いた表情を見せる。 当然だ。 この先が長い戦いの一一番最初に最優のサー・ヴァントに仕掛けると言われたのだから。

「セイバー、真名はアルトリア。 アーサー王として知られた英靈よ。 万全の状態なら貴方でも勝てるかどうかわからないわね」

「その言い方は、セイバーが万全では無いよつこに聞こえるな」

ランサーは遠回しな言い方で返答する。

「その言い方は人を不快にさせるわね・・・・・。 まあ、良いわ。 セイバーは何らかの理由でエクスカリバーの鞘を失つてゐる可能性

が高いのよ。ついでにマスターも今回の戦いを潰すために動いてるらしい。上手く動けばレジスタンスに引き込めるかもしれない

だから、ヒラナは叫ぶ。

「命令よ、ランサー。今回の戦いはセイバーの実力を見る事、こちらの手の内は明かさない事、この一つを順守して。私はその間にミッションの達成を行うわ」

「ふむ・・・・・」

『まあ、今言つても』

「ランサー、頼んだわよ

ランサーの思考は主に口で遮られる。ランサーも、それ以上は考える事は必要無いと判断した。考えるのは主の役目。彼に求められるのは圧倒的な武のみなのだ。

### 【ミッション01・配置したエネマーレの撃破】

すべての参加者に令呪を通してミッションが通達される。そして、今回最も早く動いたのは役者では無く観客だった。

昨日、ルーラーと話し合い自分たちが勝つ方法を模索した英一はミッション達成の特典に注目する事になる。

聖杯戦争に参加するサーヴァントはそれぞれ宝具と呼ばれる必殺

武器を持っている。少なくとも~~やつ~~の認識を持つべきだと英一は念押していた。

「じゃあルーラーにもあるんだろ、そういうの」

「無いですよ」

英一は句を言つてゐるのか理解できなかつた。

「正確に言つと、有つても使い道が無い、と言つべきでしょうか。私の宝具は特攻……と言つのでしたね。とにかく使用に際し私の消滅を前提とします。令呪を使えば消滅は避けられるかも知れませんがそれにしたつて分の悪い賭けです。失敗したらそれこそ」

「そのまま敗北、か」

英一はルーラーの思考を先読みして言つ。

「そういう事です。頭の回転は速いようですね」

「……喧嘩売つてんのか？」

「そのまま賞賛の意を込めて言つてるんですよ。それに今回の戦いには何か得体のしれない物を感じます。マスターの家族が殺されたことも、ね」

「明らかに不自然な行動。 サーヴァントとマスターにヒツの魔術に関する情報の秘匿は不可欠。 わざわざそれを無視したアサシン陣営。 だつたな」

「それにしても、無関係な一般人を巻き込むとは・・・！」

「わかつてゐる。 セイバー」

士郎は眩きながら、歩を進める。今回参加しているマスター。西欧財閥の姫君と呼ばれる彼女。そして、何者がが行つたサーヴァントによる殺人。明らかに何かがおかしい。

「まあ、これについて文句を言つるのは後にしましょう

セイバーは士郎に目で合図する。士郎はすでに戦闘態勢を取つている。

「初めまして、と挨拶すべきか。セイバーとそのマスターよ

槍を構えた武者が一人に声をかける。

「早速で悪いが、死んでもうつとするかの！――」

ランサーは両手で槍を構えてセイバーに襲い掛かる。

「来るぞ！――セイバー！――」

「わかつてます！――シロウ！――」

来る・・・・・！衛宮士郎は直感で感じ取る。圧倒的な、凄まじいまでの殺氣。目の前の槍兵の真名はかなりの物であると思われる、圧倒的な力のカタマリ。

故に彼はここに戦わざるを得ない。

「行きます！！」

セイバーが叫ぶ。

二つの巨大な力がぶつかり合つた。

「ところでマスター。 一つ聞いておきたい事がある

「どうしたの？ アーチャー」

アーチャーは晶に話しかける。晶はすぐにでも出ていくつもりだつたんだろう。不機嫌そうな顔でアーチャーを見る。

「貴女が私を召喚したのは本当に偶然なんだな」

「そうだよ」

それがどうかしたかとばかりに晶は答える。

「・・・・・いや、それだけ確認できれば問題は無い」

そう、それがどれだけ天文学的な確率を乗り越える事が必要な事象だったとしても。

彼はマスターに従うだろう。

それが、彼の有り方なのだから。

「アサシン、行こう。お嬢には戦わせない」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3975y/>

---

Fate/ nightmare

2011年11月24日20時59分発行